

◆平成24年度 第1回キャリア教育講演会

中学校1・2年、高校1・2・3年・卒業生・職員・保護者対象

- 1 日時 平成24年6月19日(火) 6・7限(14:30～16:10)
- 2 講師 渡部 陽一(わたなべ よういち)氏 (戦場カメラマン)
- 3 演題 「 戦場の現場から祈りを捧ぐ～命の大切さ 互いを愛し、敬いあうこと～ 」
- 4 プロフィール・講師職歴・経歴

学生時代から世界の紛争地域の取材を続け、以後、激変する世界情勢の渦中に飛び込み、戦場・変革現場での取材・発信を続ける戦場カメラマン。各地の取材を通じて痛感した命の大切さ、深淵な人間愛、平和希求のメッセージを、写真と文章で世界に発信することを天命とし、講演活動も精力的に実践中。

■職歴・経歴

1972年9月1日静岡県富士市生まれ。明治学院大学法学部法律学科卒業。
学生時代から世界の紛争地域を取材。これまでの主な取材地はイラク戦争のほかルワンダ内戦、コンボ紛争、チェチェン紛争、ソマリア内戦、アフガニスタン紛争、コロンビア左翼ゲリラ解放戦線、スーダン、ダルフル紛争、パレスティナ紛争など多数。



5 講演要旨

蒸し暑い梅雨の6限目、薄暗い体育館のスクリーンに、渡部陽一氏が撮影した戦場の映像が映し出された。渡部氏の取材中にすぐそばで爆裂音がしたり、銃を持った兵士がいたり、普段新聞やニュースでしか見聞きできない映像を、生徒たちは食い入るように見つめていた。

いつもTVで拝見する、あのカメラマン姿で渡部氏が登場するやいなや、会場からは大歓声があがった。我々の多くが期待していたとおり、あの独特の、ゆっくりとした口調で自己紹介をされた。全体を通して、ステージを一杯に使い、身振り手振りを大きくして、演劇さながらの迫力ある講演会となった。

講演の内容は、大きく分けて三部構成であった。

第一部：どうして戦場カメラマンになったのか

転機は20歳の時に訪れた。大学の先生から、アフリカの「ピグミー族」について教えてもらい、是非とも会ってみたいと、現地に赴いた。2週間ほどさまよい、食料や水も無くなり、空腹の状態でフラフラしているところでトラックが通りかかり、何とか乗せてもらった。九死に一生を得た渡部氏であったが、さらに恐ろしい出来事が待

ち受けていた。

20人程度の、中学生くらいの少年たちが森の中から出てきてトラックを取り囲んだ。頭に鉢巻を巻いて、銃や鉈を手を持ち、無表情で見つめていた。トラックのドライバーから、頭を伏せるように言われるのと同じくして、いきなり銃声がして金属音が鳴り響き、トラックから転げ落ちてしまう。殺されると思ったが、身ぐるみを自ら剥いで、少年兵らに渡すことで、さらなる銃撃は受けずにすんだが、銃座で滅多打ちにされてしまった。生きていたのは「運が良かった」とのこと。

その時に起きていたのが、「ルワンダ内戦」である。ツチ族とフツ族の間の内戦でもの凄い数の難民が発生し、100万人が命を落としたと言われている。苦しむのは女性や子どもたちで、次々とジャングルの中に連れて行かれていったそうである。中学生くらいの少年兵たちは、もちろん、学校には通うことはできなかった。

帰国後、その経験を家族に伝えようとしたが、言葉だけでは理解してもらえなかった。そこで、もともと大好きだったカメラや写真を利用してこの惨状を伝えることができるのではないかと考えた。20歳のころから今に至るまでの約20年間、「戦場カメラマン」としての活動を続けている。

取材を続けていく中で、戦争状態は当事者国同士では解決できないということに気づいた。第三者となる存在が必要で、手をさしのべてくれる存在が必要であるとのこと。そのためには、「相手のことを知る事」が大切であると力説された。

第二部：写真を通じて、戦場に生きる子どもたちの声を伝えたい

戦争が起きる理由として、「民族・宗教・領土・国境・環境」などの問題が挙げられるが、渡部氏は、「石油」の問題を例に挙げて説明された。イラクのバグダッドに武器を持った兵隊が駐在している写真がスクリーンに映し出された。「イラクの皆さん」と「外国の皆さん」という表現を巧みに使いながら、中学生でも理解しやすいように、「石油」を巡って、紛争が起きていく過程を紙芝居のような感覚でスクリーンを使いながら説明していった。使っている言葉は丁寧な言葉なのに、写されている写真は物騒なものばかりで、そのギャップが逆に生徒にとっては、強く印象に残っているようだった。

67年前に広島・長崎で使用された原子爆弾のような、化学爆弾(劣化ウラン弾)がイラクの地でも秘密裏に使用された。イラクのお母さんたちは、子どもを授かって、大事に育てているのだが、土や水に入り込んだ放射能が影響して、体が動かない赤ちゃん・目が見えない赤ちゃん・白血病の赤ちゃんなどが生まれていった。写真には、首の周りに悪性腫瘍ができた男の子や、右眼が失われた子どもが写っていた。爆撃で病院や薬局は破壊され、子どもたちの薬はない。世界中の医者が結集してイラクへ赴くも、テロリストなどに捕まって薬が燃やされてしまう。そのような劣悪な環境の映像と共に、渡部氏の話は続く。

イラクのある校長先生の話。戦時中だが、学校を開くという決断をする。その時に映し出された子どもたちの「笑顔」が印象的であった。ぼろぼろのイスや机、床に座りながらの授業でも、子どもたちは、楽しそうに学んでいる。最高気温が58℃にもなるイラクで手放せない、命の水が入ったペットボトルの写真。母親が苦勞して闇市で仕入れてきた制服は、みんなバラバラ。学校の外にでると、兵士が銃を構えている写真。

「家族みんなで力を合わせて、一日を生き延びること。一回で良いからご飯を食べること」が大事にされると、渡部氏は強く感じたそうである。

第三部：質疑応答

冒頭から、第三部は質疑応答と宣言されていたので、生徒たちも積極的に手を挙げていた。

Q1 戦場に行くときに、家族や友人は心配しませんか？(高校2年生男子)

A 2009年に結婚された渡部氏は、「家族に支えられている」と述べて、小さい頃から戦争状態にあるような外国で過ごした経験のある妻には、結婚前から支えられていたと述べた。

戦地に赴くときの約束は、「しつこいほど、電話をし、メールを送り、直筆の手紙をかくこと」だそうである。互いにいつも近くにいるような感覚を保つことが肝要なのである。

安全第一・危機管理第一と言われ、「家族が第一、仕事は第二」という名言を残された。

Q2 貧しい国に、給食付きの学校を作りたい。そのような仕事に就くにはどうしたらいいですか？(高校3年生女子)

A 一つひとつやっていくこと。具体的には、「大人になったら外国に飛び出すこと」。びっくりすることや、信じられないことが降りかかってくる。でも、必ず夢につながる。自分を支える大きな力になる。

各国の街のどこかで私を見かけたら、一緒にカフェをしましょう(爆笑)。そして、国際情勢について、語り合しましょう。世界のどこかで会いましょう。

Q3 高校生活でやっておいて良かったこと、やっておけば良かったことは何ですか？(高校3年生男子)

A やって良かったことは、「青春十八切符」で日本中を旅行したこと。現在の仕事にもつながっている。

やっておけば良かったことは、「留学」。高校生の時にしておけば良かった。若ければ若いほど、大冒険的な経験ができる。高校生の時はバドミントン部に所属していて(なぜか爆笑)バイトができなかったので、留学することができなかった。

ちなみに、高校の時の夢は「魚博士」(またまた爆笑)になることだったようだ。生徒に「将来の夢は、何ですか。」と逆に尋ねたところ、「昆虫博士」という返しがあつた。

講演の最後に、このようなメッセージを残された。

「カメラマンとして、世界の声を伝えることが自分の仕事。それだけでなく日本の子どもたちを世界に伝えることも、今後考えていきたい。みなさんと世界で再会できることを楽しみにしている。」

台風接近というアクシデントにも関わらず、TVで見るあの穏和で優しい口調で、深い内容の講演をして下さった渡部氏。90分という時間があつという間に過ぎていった。つい数ヶ月前までアフガニスタンでの従軍カメラマンとしての仕事を終えられた感想として、「20世紀は戦争の世紀と言われているが、21世紀はロボットによる戦争の世紀になるのかもしれない」と述べられていたのが印象的である。今後も、渡部氏が無事に取材活動をされて、世界の国々の「今」を伝えて下さるのを玉高関係者一同、応援しています。

◆平成24年度 第2回キャリア教育講演会

中学校1・2年、高校1・2・3年、卒業生、職員、保護者対象

1 日時 平成24年12月10日(月) 5・6限(13:30~15:10)

2 講師 福岡 伸一(ふくおか しんいち)氏(生物学者)

3 演題 「生きることは学ぶこと」

4 プロフィール・講師職歴・経歴

1959年東京生まれ。京都大学卒業。ロックフェラー大学、ハーバード大学研究員、京都大学助教授などを経て、現在、青山学院大学理工学部化学生命化学科教授。

研究テーマは狂牛病感染機構、細胞膜タンパク質解析など。

研究のかたわら、「生命とは何か」を分かりやすく解説した著作を数多く著す。主な著書に『プリオン説はほんとうか?』(講談社ブルーバックス 講談社出版文化賞化学出版賞)、『生物と無生物のあいだ』(講談社現代新書 サントリー学芸賞、中央国論新書大賞)、『動的平衡』(木楽舎)など。

専門的学術の世界を多くの人に響く魅力的な表現で語り、生物学の本がベストセラーとなるような希有な存在。他に「週刊文春」「AERA」に連載コラム執筆。NHK-BS「いのちのドラマティック」にレギュラー出演。また、フェルメール・センター銀座の館長として「フェルメール光の王国展」の慣習を手がけるなど多方面で活躍中。

5 講演要旨

学校長による講師紹介の後、福岡伸一氏が体育館ステージに登壇される。穏やかな語り口の自己紹介で講演が始まった。

幼い頃、昆虫が好きで、両親が買ってくれた顕微鏡で観察した蝶の鱗粉の美しさに感動し、顕微鏡の仕組みに興味を持つようになった。顕微鏡について調べるうちに、17世紀のオランダで顕微鏡を用いて細胞や赤血球などを観察していたレーウエンフックという人物を知る。彼が住んでいたデルフトという小さな町に、同じ頃住んでいたのが画家のフェルメール。レーウエンフックの観察記録ノートに画家の手によると思われる昆虫のスケッチが残されおり、フェルメールが描いた可能性があると考えている。

ここまで、デルフトの古い地図や現在の町の写真を紹介しながら話をされ、話を聞く私たちは17世紀のオランダにタイムスリップしたかのような感覚に陥る。生物学者の福岡氏がなぜフェルメールに詳しいのか、繋がりがやっと分かってきた。好奇心旺盛で、「なぜ？」を大切にされる姿勢が印象的である。関連することに次々と興味を持たれ、推論を楽しまれている姿が研究者としての氏の姿と重なる。その後、話題は現在の科学のあり方と福岡氏の研究へ。

研究生活に入ったころ分子生物学を専攻するようになり、新種の昆虫を発見するのに喜びを感じるように、新しい遺伝子を発見することに喜びを感じるようになった。そして、発見したのが「GP2(グリコプロテイン2型)」という遺伝子だ。これまでの科学は「機械論」すなわち「メカニズム」で生命をとらえてきたため、「GP2」遺伝子についても初め機械論的に研究していた。しかし、仮説通りの結果が得られず壁にぶつかる。研究に使うマウスを作るのには、ポルシェ3台分が買えるほどの研究費が投じられている。研究者としてのこの大きな危機を乗り越えるために、発想を変える必要が生じた。その時ヒントになったのが、「生命は機械ではない、もっと流れ流れているものだ」という、ルドルフ・シェーンハイマーの言葉であった。彼は当時誰も用いなかった斬新な実験を行い、合成と分解の循環という動的な動きこそ生命だと考えた人物である。生命は流体に近い「常に流れているもの」というシェーンハイマーの考え方を発展させ、「動的平衡」という考え方(=生命を構成する要素は絶え間なく更新される、平衡が絶え間なく求められる、生命は柔軟で可変的、常に回復・修復されるもの)で生命を捉えるようになった。そこにGP2遺伝子も絡んでいるのでは、と考えて研究を進めている。

研究が思い通りに進まなくても諦めない気持ち、粘り強くものごとに取り組む姿勢が成功には不可欠なのだと
いうことに改めて気付かせてくれるエピソードであった。また、物事に行き詰まった時に「発想の転換」が必要だ
ということも再認させられる。対象について多角的に考えることの重要性を生徒たちも感じ取ってくれたのでは
ないだろうか。

続くお話では、動的・流動的な私たちの身体が、なぜ「わたし」という一貫性を保つのか、わかりやすい喩えで
話して下さった。

一つの細胞はジグソーパズルのピースのようなもので、どこかのピースが欠けても周りのピースの凹凸によって新しいピースの形が作られるのに似ている。このように考えてみるといろんなことが見えてくる。私たちは自分の体をユニットで考えているが、動的平衡の考え方から言えば、鼻なら鼻と部分的に機能だけを切り取って考えることはできない。嗅覚は食べるという行動にも繋がっており、延いては体全体と繋がることになる。

このように「つながり」「流れ」で生命を考える例として、「脳始」「脳死」に対応した新しい「誕生」の概念)や
「抗ヒスタミン剤の限界」(一時的部分的に見れば、花粉症によく効くが、長いスパンで考えると副作用が出たり
効かなくなったりする)について分かりやすく紹介して下さいました。また、GP2遺伝子が新しい病気の治療法や薬
の開発に応用される可能性についても述べられた。そして、講演は終盤へ。

「役に立つ」というのはオマケで「新しい発想・考え方が見つかる」というのが科学の基礎研究の役割だと思

う。
機械論的な考えでは自然や生命はとらえられない。時間の関数として、全てのものが可変的であり、相補的であるので、部分的思考に陥って、ある部分の最大効率を考えると、長い目で見た時、実は不幸が起こる。動的な流れを止めないことが大事である。近代科学は機械論的な考えで発展してきたが、3/11の出来事を思い出すと、私たちがあまりに機械論的な考え方によって自然をコントロールしようとしてきたために破綻したのではないかと思う。みんなが過ごす学校や社会も動的平衡で考えることができる。絶えず人は入れ替わる(動的)が伝統が残されている(平衡)。

自分探しを自分の中に求めないことも大切。関係性の中で自分をとらえると自分が見えてくるのではないか。細胞は自分が初めからどのような役割・パーツ分かっているわけではない、柔軟な存在なのである。

最後に再度フェルメールの絵がステージに映し出された。

フェルメールは線で絵を描かない、線で世界を切り取らない。光の粒を丹念に繋げることで世界を表現しようとした。機械論的というより動的平衡の視点で世界を見ていたのでは？

動的平衡の考え方とフェルメールの絵とが見事に繋がりが、講演に幕が下ろされた。

〈質疑応答〉

Q 先生は「動的平衡＝環境」と言われたが、機械論の考え方で作られたエネルギーは問題が生じている(原発など)。先生は、新しいエネルギーを作り出していくべきと考えられるのか？それとも、昔のような暮らしにな

ればよいと考えられるのか？

A 動的平衡は流れ・循環を大切にする考え方。エネルギーは私たちの生活に欠かせないので自然のあり方に親和的な方法が取られればよい。エネルギー問題はこれまで二酸化炭素を出さない方法がよいと主張してきたが、自然界・動的平衡の考え方に立てば二酸化炭素は必ず生じるものである。二酸化炭素そのものがないのではなく、出し過ぎているのが問題なので、植物の力を使って循環させ出し過ぎないようにしていけばよい。原子力は二酸化炭素を出さないからクリーンだと考えられているが、途中の過程で二酸化炭素が沢山出る。原子力廃棄物を浄化するサイクルシステムはもともと自然界にない。原子力は生命に親和的でない。

Q GP2遺伝子の研究で行き詰まった際に、動的平衡という考え方を発見したということだが、新しい考え方を見出すコツは？

A ゼロから考えた見つけた考え方ではなくて、先人(シェーンハイマー)の考え方を応用しただけ。行き詰まった時はゼロからではなく、人間がこれまで考えてきた歴史・文化の中にヒントを求め、とらえ直すことが大切。長い時間軸の中で、文化も循環していると思う。

質問は、ともに3年生からであったが、レベルの高い質問に会場からは感嘆の声が漏れた。全体を振り返ると、非常にアカデミックな講演会であり、学問の奥深さを感じさせてくれた。思考の大転換・発想の転換が求められてるこれからの時代を担う生徒たちに、大きなヒントをくれた。

